

愛知川町の雛人形・五月飾り

田中正流

Hina-dolls and May-decorations in ECHIGAWA-TOWN

TANAKA, Masaru

愛知川町史研究 第3号 別刷

愛知川町教育委員会 町史編さん室

2005年3月

愛知川町の雛人形・五月飾り

田中正流

はじめに

人形を季節やことある毎に贈答する風習は古くからあったが、現在では雛人形と五月飾り以外ほとんど行われない。子供の初節句に人形を贈り祝う風習は江戸時代中期ころよりは



写真1 藤宮家所蔵雛人形

じまったと考えられている。また京都や江戸を中心に工芸技術が発達し、人形の種類も豊富になった。それに伴い地方独特の人形なども生まれた。愛知川は中山道の宿場町であるため、古くから京都、江戸などと交流も深く様々な土地の人形が現存している可能性がある。

そこで筆者⁽¹⁾は愛知川町史編さん室より、愛知川町内の人形飾り調査の依頼を受け、平成一七年二月一日に実施した。午前中は、愛知川町愛知川一五六六番地(大字愛知川源町)の藤宮家にて雛人形を調査した。藤宮家は真宗大谷派等覚寺の住職として代々続いている家である。午後は、旧郡役所へ場所を移し、西村家旧蔵の雛人形と五月飾りの調査をした。西村家は愛知川町愛知川一七二二番地(大字愛知川泉町)にあり、かつては華陽堂薬局を営んでおり、のちに伊吹正化学工業を創業した。平成一六年二月に、町内の廃棄物処理業者を通じて町史編さん室へ寄贈されたものである。現在、邸宅は伊吹正化学工業社員寮になっている。

なお当日は、原島知子執筆委員(民俗編)および福持昌之氏(事務局)が補佐に当たった。以下その報告を行う。

一 藤宮家所蔵 雛人形

箆笥の上に屏風を背にして男雛・女雛が飾られている(写真1)。三人官女や雛道具はあったらしいが現存していない。普段は床の間に飾られるそうである⁽²⁾。頭の材質は桐塑製で



写真 2 女雛

と違い人形問屋が集まった場所がない。しかし四条通や五条通に雛人形を売る店が比較的多かったようである。

その上に胡粉を塗り重ね、墨で顔を描いている。桐塑とは桐のオガクズを主材料に、生麩糊を加えて練り、粘土状にしたもので、型を使い木彫の代用品として量産のために考えついたものである。髪は経年の劣化で損じている(写真2)。これは絹糸を素材とする髪を鉄媒染にて染めているためである。

全体の構成として男雛は、緑の束帯風の衣装に冠を被り、手に尺を持つ。女雛は五衣に裳を付け、冠を被り、手には桜扇を持つ。有職に則らない華やかで豪華な町雛(4)といえる。顔付きはガラス目ではなく描き目であるなど京風の特徴を持ち、衣装の裂や模様から幕末から明治時代初期にかけての雛人形だと推測できる。藤宮家では明治初めの頃に嫁いできた方が持参したと伝えており、人形の製作年代と一致する。また藤宮家は代々真宗大谷派等覚寺の住職を勤めており、仏具など道具類は京都で購入していたそうである。京都では江戸

京都で道具類を購入に出た際に、雛人形なども入手したのではないだろうか。藤宮家ではこの雛人形以外に五月飾りもあるということである。

二 西村家旧蔵 雛人形

現在の所蔵は愛知川町教育委員会町史編さん室であり、旧郡役所で保存している。十五人揃えの段飾りであるが、男雛・女雛と道具類が欠けている。男雛女雛は現存しないが、他の人形類から古今雛の系統を引く町雛であることがわかる。また人形はセットで購入している。セットで雛人形を販売するようになるのは、デパートの発達と密接に関係する。日本のデパートの歴史は明治三七(一九〇四)年に三井家から独立した三越呉服店が始まりと言われている。デパートでは雛人形をセットで売り出すようになり、江戸時代より続いてきた雛人形の販売形態が変化してきた。またデパートの拡大に伴い、全国的に地域差がなくなり、どこでも同じ雛人形を購入することが出来るようになった。現在一般に販売されている段飾りは、昭和初期にはほぼ全国に行き渡り、今日見られるような雛祭りが形成されたのである。この西村家旧蔵の雛人形は衣装が金襴風で華やかな作りとなっている。その点を見ると埼玉県や静岡県などで大量に製作された雛人形のような印象を受けるが顔付きは京都風のイメージがある。

十五人揃えの中の仕丁は衛士(えいじ)や三人上戸(さんにんじょうこ)とも呼ばれ、笑・泣・怒の三様に表現されることも



写真3 仕丁

戸風では台笠・沓台・立傘を持っており、大名の婚行列の姿である。どちらにしても雛壇の中では珍しい地下であり、雛壇が賑やかになるにつれ追加されていったといえる。この仕丁は台笠・沓台・立傘を持つことから江戸風のように見えるが、烏帽子を被らずに首の後ろに引っかけているなど京都風の特徴もあり、全国的に画一化されてしまった後の雛人形なのではないだろうか。

二 西村家旧蔵 五月飾り

端午の節句は、現在では男子の成長を祝う行事として知ら

れている。中国から伝来した行事だといわれ、古代より意味は変化しつつも現在まで続いている。またそれに伴い飾り方も変化してきた。端午の節句に甲冑を飾った最古の記録は管見の限り、『増鏡』の建長三(一一五一)年五月五日の記載である。甲冑を飾るなどこれまでの公家を中心とした端午の節句では考えられなかった事だと思われる。江戸時代に五節句が制定され、なかでも端午が重視された。端午の節句に付き物の菖蒲が尚武に通じること、武家にとっては跡継ぎとなる男児の出生と成長が最大の慶事であったからだと考えられる。また庶民も立身出世を願う模倣していった。江戸時代中頃までの五月飾りは屋外に飾る「外飾り」が主流であったが、次第に外飾りの多くは、ミニチュア化し屋内に飾られる「内飾り」に変化してきた⁽⁶⁾。これが現在の五月飾りの原型となったものである。明治になると五節句が廃止され、西洋化の影響などもあり一時衰退したが、明治三〇年頃には復活する。京都を中心とした関西では、緋毛氈よりも真菰を敷き、「大將さん」と呼ぶ武將の人形を中心に置くことが多かった。またこの頃から雛人形と同様に百貨店で販売されるようになり、雛人形と同様にセット化が進んだ。戦前戦後での最も大きな違いは、戦後は大人顔の武者人形がほとんどなくなったことである。段飾りのセットも昭和四〇年代までは全国的に数多く見られたが、その後は住宅事情等により減少し、現在ではほとんど見なくなつた⁽⁷⁾。

西村家の五月飾りは、鎧を中心に陣太刀、弓、松明、扇笠、揃・飾太鼓・陣笠の軍扇陣笠、飾り馬、粽、柏餅、菖蒲酒、



写真4 五月飾り

付属の人形類である。鎧は唐櫃に入っている。鎧は唐櫃の上に鹿の皮を敷き台座とし、この上に飾る（写真4）。

兜の鍬形は

鍬形台の上に付け、竜頭は玉の持っていないタイプである。吹き返しには彫金の細工がされ重厚感がある。全体的に緋色の威糸（おどしいと）が使用され、小札板（こざねいた）⁽⁸⁾を固定している。佩楯（はいたて）⁽⁹⁾は小手や沓と共布で出来ている。以上のような鎧飾りであるが、京甲冑らしく金小札緋威糸を用いた豪華で雅やかな甲冑である。鎧櫃も太鼓櫃ではなく、唐櫃であり昭和期以降の特徴が見て取れる。

まとめ

愛知川町内に残る雛人形と五月飾りを調査したが、調査した人形が比較的新しいこともあり、地域差や愛知川町の特徴は見えてこなかった。しかし今回調査した人形はいずれも上製品であった。藤宮家の雛人形は江戸期から明治初期にかけ

て調進されたものだが、明治六（一八七三）年一月には、太政官布告で五節句廃止令が出され、廃業する店も多い時代であった。また維新後の急速な社会の変化は、古い伝統的な素材から新素材による人形が登場するなど人形界にも変革をもたらした。この時期の人形の調査は人形史や民俗学の研究をする上で興味深い。まだまだ調査不足であり、愛知川町の人形文化を語ることは出来ないが、さらなる人形の遺品や聞き取り調査によって実態を明らかにすることが出来るだろう。

註

（1）筆者は京都市上京区にある宝鏡寺門跡百々御所文庫で学芸員

をしている。宝鏡寺は代々の内親王が住職を勤める尼門跡寺院であり、多数の人形を所蔵している。通称人形寺とも呼ばれ春と秋に一般公開もしている。宝鏡寺の概要については、

拙著「皇室ゆかりの人形文化 宝鏡寺の雛と人形展示」

『郷玩文化』一六三、郷土玩具文化研究会、二〇〇四年）を参照頂きたい。

（2）藤宮修子氏のご教示による。

（3）これは黒袍の束帯を着た男雛の黒袍部分が風化して崩れている現象と同様であり、伝統的に黒染めは鉄成分を含む染料に依存している。山川暁「黒染めの技法とその保存・修理の現状について」、『人形玩具研究』一三、日本人形玩具学会、二〇〇二年）参照。

（4）町雛とは、江戸時代に庶民が一般に所持していた雛人形をいう。御所や公家、大名家などで調進された有職故実に則った

有職雛とは違い人形用に華やかに着付けられることが特徴である。現在の雛人形は一般に古今雛と呼ばれる町雛の系統を引いている。

(5) 一般に酒宴の様子は、雑役の年季明けの酒宴であるとか宮廷の婚礼の祝宴をしている姿などと言われているが根拠はない。

(6) 内飾り誕生のかけには、工芸技術の発展とそれによる雛人形や雛道具の浸透なども要因の一つであったと考えられる。

(7) 端午の節句と五月飾りの変遷については、林直輝「端午の節句と五月飾りの変遷」(藤枝市郷土博物館図録「五月飾り 祈りと祝いのかたち」⁵、二〇〇二年)に詳しい。

(8) 小札板とは、小札を横に並べ合わせて革で綴じ、漆で塗り固めて作られた板のことである。また小札板には本小札、本縫延、包小札、板物、当世小札、縫延、揺札と呼ばれるものがある。

(9) 佩楯は、膝鎧ともいい、膝辺りを守る鎧のことである。

(愛知川町史調査員)